



## 「農学国際協力」誌に期待すること

山内 章

名古屋大学農学国際教育協力研究センター長

わが国にとって、国内の農業生産に加えて、海外における安全な食料の安定した生産はきわめて重要な位置を占めている。アメリカ、中国、オーストラリアなどに加えて、アジアやアフリカなど、多くが熱帯地域にある発展途上国における食料生産は、わが国の食料確保にとって非常に大きな位置を占めている。日本国内だけでは、将来にわたって食料を十分に確保できないことは明らかである。一方、地球規模での気候変動に伴う降水量や農業用水の減少や砂漠化などの環境の劣化に伴って持続的農業生産が危機にさらされている。このような条件のなかで人類全体の食料を確保することも非常に重要である。

それだからこそ、日本に留まらず海外での農業生産向上のための研究や実際の農業に取り組むことのできる能力を有する人材が重要となる。日本がこれまで蓄積してきた集約農業の先進技術に比べれば、とくに途上国の農業技術は粗放的・初歩的な発展段階にあるが、ここに日本の既存技術と今後の研究によって開発される技術を適用することによって、農業の生産性は着実に向上することが期待される。その際には、その国の経済条件や農業生態条件に適応できるように技術を改良し、あるいは独自の技術を作っていくことが重要である。したがって、世界には日本の研究者が活躍できる、また活躍が期待されている現場がある。しかし、実際に国際的な現場で研究に従事している研究者の数は期待されているレベルより遙かに少なく、ここにわが国の若い研究者の人材育成が必要な理由がある。

今後、農業研究者・技術者、実務者には、環境制御された条件下（たとえば実験室内）と、生物が機能を実際に発揮するフィールド、あるいは社会における現象の双方に深い関心と理解があり、学際的視野を有した人材がますます求められる。そこで、わが国は国内において研究するだけでは不十分で、海外に出てそのような研究に取り組む研究者や実務者の育成を行わなければならない。すなわち、国際的視野を持った日本の農学研究者、農業技術者、海外の農学研究者、農業技術者の人材育成（学際的農業研究者）を強化する必要がある。

そのためには、研究室で「基礎」研究をやっている人たちを、いかに、とくに海外も含めた現場に目を向けて研究の出口を本気で見据えてもらうか、このきっかけをどうつくるか、この人たちを「このまま」どう巻き込むか、という視点も重要である。明治以来、欧米に追いつけ追い越せで進めてきた科学研究をさらに発展させる中で、みずからの内発的な基礎科学としての研究課題が、途上国を含めた農業生産、消費、流通の現場ではなく、欧米の一流学術雑誌からしか見つかってこないすれば、とくに農学にとっては致命的である。

そのような現場には、解決すべき地球規模の課題や新たな学術的知見の創出が見込まれる研究シーズが多くあり、「農学国際協力」誌は、農学の学問分野の統合を試行し、課題解決と研究成果の現場への適用を実現する「場」として機能しうる。農学領域の学問分野を統合した新たなアプローチの開発と実

践およびそのための教育・人材育成の場として活用していきたい。そのことによって、「農学国際協力」誌が、若い研究者・技術者をどう育てていくかについて経験交流をし、そしてそのような本来総合的学問である新たな農学の創造の場となることを期待したい。